

Abhisamācārika-Dharma における副詞の用法

古宇田 亮 修

はじめに

Abhisamācārika-Dharma は、大衆部説出世部 (Mahāsāṃghika-Lokottaravādin-) に属する律 (vinaya-) の一部であり、Skt.写本としては、1本のみが現存する。近代以降における発見者は、ラーフラ・サーンクリティヤーヤナ (Rāhula Sāṅkṛtyāyana) であり、1934年に当写本の存在をシャル (Ža-lu) 寺で確認し、写真撮影を行なっている。その後、1998年に、大正大学総合仏教研究所は、中国民族図書館との日中共同研究事業の成果として、当写本の影印版を刊行した。

なお、対応する漢訳としては、完全に一致するわけではないが、法顕・佛陀跋陀羅共訳の『摩訶僧祇律』中の「威儀法」がある。

当写本の研究としては、最初の出版本として [Jinānanda 1969] があり、内容紹介・抄訳を含む研究として [Prasad 1984] [Singh&Minowa 1988] がある。大正大学総合仏教研究所の比丘威儀法研究会では、写本全章の転写テキスト [1998; 1999]、および影印版に基づく文字表を発表した。

その後に発表された和訳 (ならびに研究) としては、以下のものがある。

第1章：[西村 2000; 2001a; 2001b; 2002] (全訳)

第2章：[吉澤 2002; 2003; 2004a; 2004b] (全訳)

第3章：[古宇田 2004b] (全訳)

第4章：[古宇田 2004a] (全訳)

第5章：[吉澤 2008] (第5章7～10節)

第6章：[松濤 2001] (全訳)

第7章：[古宇田 2005] (全訳)

このように、訳者は違えど、第5章の1~6節を除いては、和訳が公表されていることになる。

さらに、最近辛嶋静志博士（創価大学国際仏教学高等研究所所長）は Oskar von Hinüber 博士の協力のもと [Karashima 2012] の3巻本を出版し、写本の校訂、漢訳の校訂、写本の独訳、漢訳の独訳、文法および語彙集を公表するに至った。この詳細にして緻密な出版により、当写本に関する基礎研究が一通り完了したと考えられ、研究段階としては次のステップ——すなわち純粋な言語学的研究が可能になる段階——に移行したといえよう¹。その他、当写本に関する個別の研究については、[Karashima 2012: Bd I] に網羅されているので、ここでは省略する。また、以下テキストの引用に際し、パラグラフ番号は、[Karashima 2012] に従った。

当写本には、名詞、形容詞、副詞、動詞のそれぞれについて、古典梵語 (Classical Sanskrit, 以下 Cl.Skt.) では見られない特徴的な語彙が見られるが、本発表では、文章の意味を決定づけるものとしての重要性から、特徴的な副詞 (adverb, 以下 adv.) の用法を考察の対象として取りあげ、大衆部の言語 (語彙・文法) を解明するための一助としたい。以下、本論において、使用回数の多い順に取りあげることとする。

なお、副詞のうち、iti/ti/tti/nti で終る純粋なオノマトペ (例えば、khakhakha, kharakacakharakaca, vaḍavaḍa 等) については考察の対象から除外し、ここでは iti/ti/tti/nti なしで独立して副詞として用いられているオノマトペ (raṇaraṇāya 等) についてのみ扱うこととした。

なお、ローマナイズテキストは、筆者による校訂である。写本の引用に際しては、以下の凡例に従った。

¹ だからといって写本の文字や誤写についての知識が不要になるわけではないことはいうまでもない。

- (1) 写本の Daṇḍa は、上付のスラッシュ（ / ）で転写した。
- (2) 写本から読みを変更した箇所は、アクセラ単位でイタリックで表記し、註を付した。
- (3) 写本の不要文字は、{ }内に表記した。
- (4) r の後の子音の重複については、任意に正規形に直した。
- (5) 複合語以外の母音の外連声については、分解して表記した。
例：Ms. nāpi kṣamati. → na₂api kṣamati.
- (6) 写本の cch は、任意に ch に直した。
- (7) 鼻音の種別や sandhi については、任意に正規形に直した（代用 Anusvāra を正規の鼻音に訂正する等）。

参考文献ならびに略号一覧

< 和 文 >

- [浅野 1978] 浅野鶴子編：『擬音語・擬態語辞典』角川書店。
- [川村 2011] 川村悠人：「Meghadūta における反復表現：ヴァッラバデーヴァとマッリナータの解釈」『哲学』第 63 号。
- [雲井辞典] 雲井昭善：『新版 パーリ語佛教辞典』山喜房佛書林，2008。
- [古宇田 2004a] 古宇田亮修：「Abhisamācārika-Dharma 第 4 章訳註」『大正大学総合佛教研究所年報』第 26 号。
- [古宇田 2004b] 古宇田亮修：「Abhisamācārika-Dharma 第 3 章訳註」『仏教文化学会十周年・北條賢三博士古稀記念論文集：インド学諸思想とその周延』山喜房佛書林。
- [古宇田 2005] 古宇田亮修：「Abhisamācārika-Dharma 第 7 章訳註」『三康文化研究所年報』第 36 号。
- [手引] 比丘威儀法研究会編：『『大衆部説出世部律・比丘威儀法』梵文写本影印版手引』，大正大学総合佛教研究所，1998。
- [中村 2000] 中村了昭：『マハーバーラタの哲学：解脱法品原典解明』（上・下）平楽寺書店，1998-2000。

- [西村 2000] 西村実則：「大衆部・説出世部の僧院生活：『アビサマーチャーリカー』I, 一～三（和訳）」『斎藤昭俊教授古稀記念論文集』。
- [西村 2001a] 西村実則：「大衆部・説出世部の僧院生活（2）：『アビサマーチャーリカー』I, 四（和訳）」『石上善應教授古稀記念論文集』。
- [西村 2001b] 西村実則：「大衆部・説出世部の僧院生活（3）：『アビサマーチャーリカー』I, 五～七（和訳）」『大正大學紀要（人間學部・文學部）』第 86 号。
- [西村 2002] 西村実則：「大衆部・説出世部の僧院生活（4）：『アビサマーチャーリカー』I, 八～十（和訳）」『櫻部建博士喜寿記念論集』。
- [松濤 2001] 松濤泰雄：「『比丘威儀法』第六章試訳」『石上善應教授古稀記念論文集』。
- [梵和] 荻原雲来編纂，辻直四郎協力，鈴木學術財団編：『漢訳対照 梵和大辞典（新装版）』講談社，1986 (repr. 1990⁵)。
- [水野辞典] 水野弘元：『増補改訂 パーリ語辞典』春秋社，2005。
- [吉澤 2002] 吉澤秀知：「『Abhisamācārikā』第 2 章（1～3）試訳」『大正大学大学院研究論集』，第 26 号。
- [吉澤 2003] 吉澤秀知：「『Abhisamācārikā』第 2 章（4～7）試訳」『佐藤良純教授古稀記念論文集』。
- [吉澤 2004a] 吉澤秀知：「『Abhisamācārikā』第 2 章（8～9）試訳」『大正大学大学院研究論集』，第 28 号。
- [吉澤 2004b] 吉澤秀知：「『比丘威儀法』における齒木」『三康文化研究所年報』，第 35 号。
- [吉澤 2008] 吉澤秀知：「『比丘威儀法』に説かれる僧院の生活」『多田孝正博士古稀記念論文集』。

< 欧 文 >

[AMgD] *An Illustrated Ardha-Māgadhī Dictionary*, Tokyo, 1977.

[Apte] Prin. Vaman Shivaram Apte: *The Practical Sanskrit-English Dictionary*,

Revised & Enlarged Edition, Kyoto: 臨川書店, 1986.

[BHSD] F. Edgerton : *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, New Haven, 1953.

[BHSG] F. Edgerton : *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, New Haven, 1953.

[BhiV] Gustav Roth: *Bhikṣuṇī-Vinaya: Manual of Discipline for Buddhist Nuns* (Second Edition), Patna, 2005.

[Cone] Margaret Cone: *A Dictionary of Pāli*, Part I, Oxford, 2001; Part II, Bristol, 2010.

[Jinānanda 1969] B. Jinānanda: *Abhisamācārikā [bhikṣuprakīrṇaka]*, *Tibetan Sanskrit Works Series*, Patna.

K. → [Karashima 2012]

[Karashima 2012] Die *Abhisamācārikā Dharmāḥ*: Verhantensregeln für buddhistische Mönche der *Mahāsāṃghika-Lokottaravādins*, herasugegeben, mit der chinesischen Parallelversion verglichen, übersetzt und kommentiert von Seishi Karashima unter Mitwirkung von Oskar von Hinüber, 3Bd, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology Soka University.

[Kāśikāvṛtti] Svāmī Dvārikā Dāsa Śāstrī and Ācārya Kālikā Prasāda Śukla (ed): *Nyāsa or Pañcikā Commentary of Ācārya Jinendrabuddhipāda and Padamañjarī of Haradatta Miśra on The Kāśikāvṛtti of Vāmana-Jayāditya*, part. I-VI, Varanasi, 1983-85.

[Monier] Monier Williams: *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1899.

Ms. *The Facsimile Edition of the Abhisamācārika-Dharma of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādīn*, Taishō University, 1998.

[Oguibéine 2002] Boris Oguibéine: Material for the Lexicography of Buddhist Sanskrit of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādins (I), 『中央學術研究所紀要』第 31 号.

[Oguibéine 2005] Boris Oguibéine: Material for the Lexicography of Buddhist

Sanskrit of the Mahāsāmghika-Lokottaravādins (II), 『中央学術研究所紀要』第 34 号。

[Pāṇini] Rama Nath Sharma: *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*, vol. I-VI, 1996-2003.

[PTSD] T. W. Rhys Davids and William Stede: *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, London, 1921-25 (repr. 1986).

[Prasad 1984] M. Prasad: *A Comparative Study of Abhisamācārikā, Tibetan Sanskrit Works Series vol. XXVI*, Patna.

[PSM] *Pāia-Sadda-Mahaṇṇavo (A Comprehensive Prakrit-Hindi Dictionary)*, Delhi, 1986.

[PW] O. Böhtlingk & R. Roth: *Sanskrit Wörterbuch (=Petersburg Wörterbuch)*, 1855-75.

[Singh&Minowa 1988] S. Singh and K. Minowa: A Critical Edition and Translation of Abhisamācārikā Nāma Bhikṣu-Prakīrṇakaḥ (Chapter one), *Buddhist Studies, The Journal of the Department of Buddhist Studies of the University of Delhi*, vol. XXII.

本 論

1 **sukhākam** (13)² 「そっと、静かに」

sukhākam は、この文献固有の adv.であって辞書にも登録されていないが、用例から「そっと、静かに」という意味が推定される³。

§ 8. 4 sāvevihāriṇā nāva kalyata eva utthaṃtena upādhyāyasya vihārasya dvāraṃ ākoṭayitavyaṃ. yaṃ kālaṃ abhyanuḥjñā dinnā bhavati, / tato dvāraṃ **sukhākam** apaduriyāna tato prathamam dakṣiṇo pādo praveśitavyo.

直弟子は朝早く起きて和尚の精舎の戸口をノックすべきである。許可が与えられたならば、戸口をそっと開いて、まず右足から入るべきである。

² 以下、() 内の数字は、用例の使用回数である (筆者の校訂による)。

³ K. の解釈とほぼ同様である (“vorsichtig, sachte, still, ruhig, leise, langsam”).

§ 10. 4 antevāsīnā tāva kalpato yeva utthattakena evaṃ ācāryasya vihārasya dvāraṃ ākoṭayitavyaṃ. / yaṃ kālaṃ abhyanuññā dinnā bhavati, / dvāraṃ sukhākam apaduriyānaṃ prathamam dakṣiṇo pādo praveśayitavyo.

弟子は朝早くに起きて、このように阿闍梨の精舎の戸をノックすべきである。許可が与えられたならば、戸をそっと開けて最初は右足を入れるべきである。

§ 29. 4 atha dāni bhikṣu paryaṅkena niṣaṅṅo bhavati śrānto bhavati / *parvāni*¹ āmilāyanti, / na₂ api kṣamati / ubhayāni sandhī maṭamaṭāye prasārituṃ. / atha khalu eko pādo sukhākam prasārayitavyo. taṃ amuhūrte viśrāmiya sanmiñjiya dviṭīyo pādo sukhākam prasārayitavyo. / utthipitvā vā ekānte caṃkrमितavyaṃ. / 1. Ms. garbhāni.

そして、比丘がその坐法によって坐しているとき、疲れてきて、関節が青白くなったときですら、両足の関節をガーッと伸ばすことは許されない。そのときは実に、一方の足をそっと伸ばすべきである。片足を少しの間休ませた後に、折り曲げて、もう一方の足をそっと伸ばすべきである。[それから] 立ち上がって、片隅で経行すべきである。

§ 44. 6 atha khalu tato koṇakāto prabhṛti sukhākam mocayitavyaṃ. / cīvarakaṃ dhoviya vihāraṅkaṅka¹ *sthāpayitavyo*.² taṃ cīvarakaṃ yaṃ kālaṃ śuṣkaṃ bhavati tato paribhuñjayitavyaṃ. / 1. Ms. koṇako. 2. Ms. payitavyo.

そのときは実に、そこで、[衣の] 端から、そっとはずすべきである。衣を洗って、精舎の隅に置くべきである。その衣が乾いたならば、それを、身に着けるべきである。

§ 56. 4 ātmano pratisandhismi sukhākam niṣīdanakaṃ pīṭhake prajñāpayitavyaṃ. / tathā karttavyaṃ yathā ānatarikaṃ na vyāvahati. / na₂ api kṣamati yathāsukhe kṛte utthiya niṣīdanaṃ koṇe koṇe grhītvā *vaṭavaṭa*¹ nti praphoṭayitūṃ. / atha khalu sukhākam utthitvā dviguṇīkṛtvā skandhe kṛtvā ca gantavyaṃ. / 1. Ms. caṭacaṭa.

自分の持ち場⁴において、そっと坐具を椅子の上に、敷くべきである。

⁴ pratisandhi-. この語形は辞書に収録されているが、この文脈に相応しい語義

隣の者を、[騒音で] 悩ませないようにすべきである。「お楽にして下さい」[という解散の宣言] がなされたときに⁵、立ち上がって、坐具の角と角をつかんで、ヴァタヴァタとはためかせることは許されない。そのときは実に、そっと立ち上がって、二つ折りにして、肩に背負って去るべきである。

§ 60. 4 *atha ca dāni bhikṣu prahāṇaṃ upaviṣṭako khajjati / aṅguṣṭhodareṇa vā hastatalena vā sukhākam / uccaṭṭayitavyaṃ.*¹

比丘が禅堂に坐っているときに、[虫に] 咬まれたならば、そのときは実に、親指の腹か、手の平によってそっと追い払うべきである。

§ 61. 5 *na_āpi kṣamati prahāṇaṃ upaviṣṭakena maṭamaṭāya aṅgāni bhañjitaṃ. / atha dāni bhikṣusya aṅgāni duḥkhāyanti, / ekā tāva bāhā sukhākam prasārayitavyā. yaṃ kālāṃ viśrānto bhavati, / tāṃ sanmiñjiya dvitīyā sukhākam prasārayitavyā. / eko pādo sukhākam prasārayitavyo. / taṃ sanmiñjiya dvitīyo sukhākam prasārayitavyo.*¹

禅堂に坐っている者が、ガーッと肢体を伸ばすことは許されない。比丘の肢体が痛くなってきたならば、まず片腕をそっと伸ばすべきである。疲れたならば、その[腕]を曲げて、もう一方の[腕]をそっと伸ばすべきである。片足をそっと伸ばすべきである。それを曲げて、もう一方の[足]をそっと伸ばすべきである。

§ 61. 6 *atha dāni bhikṣusya vijrmbhikā āgacchati, /¹ cīvarakarṇakena² mukhaṃ pidhiya sukhākam vijrmbhitavyaṃ.*¹ 1. Ms. {yadi}. 2. Ms. cīvaracīrṇakena.

比丘があくびをしたくなったらば、衣の先端⁶で口をふさぎ、そっとあくびをすべきである。

は記載されておらず、正確な意味は不明である。禅堂において各比丘に与えられた区画という意味であろうか。Kは、“// Auf seinem eigenen Platz //”と訳す（// ... //は不確定の意）。

⁵ yathāsukha-の解釈については、[古宇田 2005: 38–43]を参照のこと。Kの解釈は異なる。

⁶ cīvarakarṇa-の字義は「衣の耳」であるから、衣の両端を意味すると考えた。

2. *gatāgatasya* (12) 「あわてて、急いで」

gatāgatasya は、語形としては、*gatāgata*-の *gen. sg. m./n.* である。しかしながら、この *gatāgata*-は、名詞ではない。結論としては、文脈からして「あわてて、急いで」の意味と考えられる。いうまでもなく *gata*-は、√*gam*-「行く」の *past participle* (過去分詞) であり、そこから「行った、行った」→「非常に急いで、あわてて、急いで」の意味が形成されたものと推測される。すなわち、*gata*-と *āgata*-の複合語ではなく、*gata*-の強意形としての **gatamgata*-から *gatāgata*-と変化したものと推測される (*calācala*-adj. 「不安定な」⁷ と同様の語形成)。Cl.Skt. では、*cirasya*; *cirasya kālasya*; *muhūrtasya* のように時間の経過を表す場合を除いて、*gen. sg.* 形が、*adv.* として使われることは存在しないため、この単語の解釈も難解であった⁸が、[Karashima 2012: III, 221] “*übereilt; überstürzt*” の新解釈をふまえて、改めて検討したところ、これを *adv.* ととることが妥当であることが確認された。

§ 4. 5 *eṣo dāni koci saṃghaṃ bhaktena śuvetanāya nimantreti, ' na dāni saṃghasthavireṇa* *gatāgatasya* *adhivāsaitavyaṃ.*

もしも、あるものが翌日の食事に僧団を招待したとしても、僧団の上座はあわてて同意してはならない。

§ 4. 10 *na_ api dāni kṣamati* *gatāgatasya* *upaviśitum*^{1. /} 1. Ms. *upaviśantaṃ*
あわてて坐ることは許されない。

§ 5. 9 *tato na kṣamati /* *gatāgatasya* *upaviśitum.*

それから、あわてて坐ることは許されない、多くの座席に童子・童女が寝ているかもしれないから。

§ 6. 5 *na_ api kṣamati /* *gatāgatasya* *adhivāsitum.*[#]

⁷ Cf. MBh. Mokṣadharmā-parvan Chap. 195, 9. [中村 2000 : (上) 562]

⁸ 筆者もかつて「行ったり来たりする人」→「交渉人、使いの者」の意味に誤訳していたので、辛嶋博士による新解釈に啓発されたことを感謝申上げる次第である。

[食事の招待に] あわてて同意してはならない。

§ 6. 9 tato na₂api kṣamati / praviṣṭehi gatāgatasya upaviśitum. / anekāye tahiṃ āsanehi garbharūpā sovāpitāni bhavemṣu. // bhājanakāni vā thapitakāni bhavemṣu. /

それから、[家に] 入る際には、あわてて坐ることは許されない—その多くの座席に幼児が寝ているかもしれないから。もしくは壺が置かれているかもしれないから。

§ 15. 5 etā dāni bhikṣū āgantukā bhavanti, vihārako uddiṣṭako bhavati, / mañcaṃ pīṭhaṃ pi caturasrakaṃ kurccaṃ biṃbohanam¹ uddiṣṭaṃ bhavati, na₂api kṣamati / gatāgatasya vihārake bhaṇḍaṃ praveśitum. / 1. Ms. bibohanam.

客比丘がいて、精舎が割り当てられたならば、すなわち寝台と椅子と四角い布と草の束と枕が割り当てられたならば、精舎にあわてて容器を持ち込むことは許されない。

§ 18. 40 na₂api kṣamati / bhikṣuṇī-upāśraye gatāgatasya varccakuṭiṃ praviśitum /

比丘尼の住所において、あわてて大便所に入ることは許されない。

§ 34. 3 tena hi⁹ evaṃ kṣatriyaparyāye kiñci kāryaṃ bhavati, / na kṣamati gatāgatasya / upasaṃkramitum. /

そうであるならば、このようにクシャトリヤの集団において [かれらが] 何か仕事をしているならば、あわてて近づくことは許されない。

§ 35. 3 etaṃ dāni bhikṣusya kiñci brāhmaṇaparṣāyāṃ kāryaṃ bhavati, / na₂ayaṃ kṣamati / gatāgatasya brāhmaṇaparṣāṃ upasaṃkramitum.

ブラーフマナの集団において [かれらが] 何か仕事をしているならば、あわててブラーフマナの集団に近づくことは許されない。

§ 36. 3 etaṃ dāni bhikṣusya gṛhapatiparṣāyāṃ kiñcit kāryaṃ bhavati, / na kṣamati / gatāgatasya āllīpitum.

家長の集団において [かれらが] 何か仕事をしているならば、あわて

⁹ Cf. Pāli tena hi “therefore; now then” [Cone: s. v. ta(d)]

て近づくことは許されない。

§ 37. 3 *etaṃ dāni bhikṣusya kiṃci tīrthikaparśāye kāryam bhavati, 'na_ayaṃ kṣamati ' bhikṣuṇā gatāgatasya tīrthikaparśā upasaṃkramitum.*'

比丘が異教徒の集団において [かれらが] 何か仕事をしているならば、比丘はあわてて異教徒の集団に近づくことは許されない。

§ 38. 2 *etaṃ dāni bhikṣusya āryaparyāye kāryam bhavati, 'na_ayaṃ kṣamati ' gatāgatasya vṛddhāntam ukkasitum.*'

そのとき、聖人 (= 仏教徒) の集団において [かれらが] 何か仕事をしているならば、あわてて最長老に近づいてはならない。

3. **puno puno** (10), **punaḥ punaḥ** (1) 「くりかえし、連続して」

この表現は、[Apte: s. v. punar] に説かれるように、'again and again,' 'repeatedly,' 'frequently' の意味であり、特に難解ではないが、反復による adv. として、当写本の文体を特徴づけている可能性があるため、ここに収録した次第である。

§ 59. 4 *atha dāni puno puno kṣīvikā āgacchati, prahāṇasya āmantriya gantavyaṃ.*'

くりかえしくしゃみをしたくなったらば、禪堂に告げてから去るべきである。

§ 59. 5 *atha dāni bhikṣusya puno puno kṣīvikā āgacchati, 'ānantarikasya vaktavyaṃ : 'āyusmaṃ mama piṇḍapātam ukkaḍḍhesi. tato gantavyaṃ'*

くりかえしくしゃみをしたくなったらば、隣の者に言うべきである — 「健在者よ、私の施食を取りなさい」と。それから去るべきである。

§ 59. 6 *atha dāni bhikṣusya puno puno kṣīvikā āgacchati, 'dharmaśravaṇasya āmantriya gantavyaṃ.*'

くりかえしくしゃみをしたくなったらば、法話室に告げてから去るべきである。

§ 60. 5 *atha dāni bhikṣuḥ khajjanako¹ bhavati, ' puno puno kaṇḍūyati, ' ānantarikasya pātraṃ dātavyaṃ. 1. Ms. sajjanako.*

比丘が [虫に] 咬まれ、くりかえし搔く場合は、隣の者に鉢を渡すべ

きである。

§ 60. 7 atha dāni na¹ pāreti vinodayitum, ' punaḥ punaḥ khanati, ' ekatamaṃte gacchiya kaṇḍūyitavyaṃ. ' 1. Ms. omits.

そのとき、[かゆみを] 抑えることができなくて、くりかえし搔く場合は、片隅に行ってから搔くべきである。

§ 61. 4 atha dāni bhikṣusya vijṛmbhikā puno puno āgacchati, nirddhāviya vijṛmbhitavyaṃ. ' prahāṇasya vā āmantriya gantavyaṃ. '

比丘にくりかえしあくびがやってきたならば、[禪堂を] 退出して、あくびをすべきである。禪堂に告げてから去るべきである。

§ 61. 7 atha dāni bhikṣusya antaraghare vā upaviṣṭasya puno puno vijṛmbhikā āgacchati, ' utthiya gantavyaṃ. '

比丘が家の中に坐っているときに、くりかえしあくびがしなくなったならば、立ち上がって、去るべきである。

§ 62. 7 atha dāni bhikṣusya puno puno vātakarma āgacchati, ' prahāṇasya āmantriya¹ gantavyaṃ. ' Ms. āmantiya.

そのとき、比丘がくりかえし屁をしたくなったならば、禪堂に告げてから、去るべきである。

§ 62. 8 atha dāni bhikṣusya vātakarma puno puno¹ āgacchati, anantarikasya pātraṃ datvā gantavyaṃ. ' 1. Ms. omits.

比丘がくりかえし屁をしたくなったならば、隣の者に鉢を与えて去るべきである。

§ 62. 9 atha dāni bhikṣusya puno puno vātakarma āgacchati, ' dharmāśravaṇasya āmantriya gantavyaṃ. '

比丘がくりかえし屁をしたくなったならば、法話室に告げてから去るべきである。

§ 62. 10 atha dāni bhikṣusya puno puno vātakarma āgacchati, ' ekamantaṃ āgacchiya karttavyaṃ. '

比丘がくりかえし屁をしたくなったならば、片隅に行っからなすべきである。

4. **jhallajhallāye** (4), **jhallajhallā** (1) 「ジャブジャブ」

この表現は、水を大量に使う様子を表すので「ジャブジャブ」という訳語を採用した。mātrāye adv. 「適量を測って、適量を」の対義語として用いられている。

§ 18. 12 udakakṛtyaṃ karentena na dāni **jhallajhallāye**¹ udakaṃ cetavyaṃ. /
atha khalu mātrāy² eva cetavyaṃ. / 1. Ms. jhallajjhaley 2. Ms. mātāy.

行水をなす際には、ジャブジャブ水をかけてはならない¹⁰。その際には、適量をかけるべきである。

§ 40. 16 labhyā dāni pāridhovanikāto mukhaṃ vā dhovituṃ, /
hastam vā nirmādayituṃ, / pātraparīśrāvaṇam vā dhovituṃ. /
na dāni kṣamati / **jhallajhallāye** ujjhituṃ. / mātrāye upanāmetavyaṃ. /

洗うための水によって顔を洗うこと、手を拭くこと、漉すための葉っぱを洗うことは許される。ジャブジャブと〔無駄に〕捨てることは許されない。適量を用いるべきである。

§ 41. 1 bhagavān śrāvastyām viharati. / te dāni āyusmanto nandanopanandanā
ṣaḍvargikā ca pādadhovanikāyām¹ **jhallajhallā**² pādān dhoviyāṇam sarvaṃ
udakaṃ sthāriya pādadhovanikāṃ omuddhikāṃ kariya ādrapādakaṃ
upanāhāhi prakṣiṇiya na eva kardamaṃ pariharanti na pāmsu. kardamaṃ
mardantā pāmsu mardentā dīrghacaṃkramaṃ caṃkramanti. /

1. Ms. pādadhovanikāyām. 2. Ms. jhallajjhallām.

世尊は舎衛城に滞在していた。健在者であるナンダナとウパナンダナと、六人組の者たちは、足洗い桶においてジャブジャブと足を洗ってから、全ての水を捨てて、足洗い桶をふせて、濡れた足で革履を履いて、泥を払わなかった。塵や泥をこすりながら、長い経行に出かけていた。

§ 41. 2 satyaṃ bhikṣavo nandanopanandanā ṣaḍvargikā ca, evaṃ nāma¹
yūyaṃ pādadhovanikāyām gacchiya **jhallajhallāye**² pādān dhoviya udakaṃ
choriya pādadhovanikāṃ omuddhikāṃ kariya ādrapādāṃ upānahāsu

¹⁰ cetavyaṃ は、√ci-「積上げる、集める」の gerundive 形に解した。K.のように siṃcetyaṃ に訂正する必要はないものと考えられる。

prakṣīpiya na_eva pāṃsu pariharatha na kardamaṃ. kardamaṃ mardantā pāṃsu mardantā dīrghacaṃkramaṃ caṃkramatha.

1. Ms. repeats {evaṃ nāma}. 2. Ms. jhallajhallāye.

比丘たちよ、ナンダナとウパナンダナ、六人組の者たちよ、汝らは実に、足洗い桶に赴いて、ジャブジャブと足を洗って、水を捨てて、足洗い桶をふせて、濡れた足で革履を履いて、塵や泥を払わなかった。泥や塵をこすりながら、長い経行に出かけていたというのは本当か。

§ 41. 25 atha khalu dāni sarvasaṃghasya pādadhovanikā bhavati, / na kṣamati bhikṣuṇā [jhallajhallāye] pādān dhovituṃ, udakaṃ choriya¹ omuddhikāṃ pādadhovanikāṃ kartuṃ. / 1. Ms. cchorayi.

そのとき実に、僧団共有の足洗い桶であるならば、比丘によってジャブジャブと足を洗うこと、[および] 水を捨てて、足洗い桶をふせておくことは許されない。

5. maṭamaṭāye (2), maṭamaṭāya (2), maṭamaṭā (1) 「ガーッと」

maṭamaṭāye¹¹, maṭamaṭāya, maṭamaṭā は、用例の分析によれば、手足を伸ばす際に勢いよくおこなう様子を表す擬態語であると考えられる。一般的に擬態語・擬音語の翻訳は、きわめて難しく、翻訳先の言語に完全に対応する語がない場合も多い。日本語でも、厳密には「手足を伸ばす際に勢いよくおこなう様子」を表す擬態語は、存在しないといってもよい。そのため、こなれた日本語とはいえないが、「ガーッと」という口語表現の一種を用いて翻訳した。この訳語により、sukhākaṃ 「そっと」という語で表現される<静けさ>の対極にある動作であることが伝われば十分であると考えられるからである。

§ 29. 4 atha dāni bhikṣu paryaṅkena niṣaṅṅo bhavati śrānto bhavati / parvāni¹ āmilāyanti, / na_āpi kṣamati / ubhayāni sandhī [matamaṭāye] prasārituṃ. /

1. Ms. garbhāni.

¹¹ Cf. [PW s. v. maṭamaṭāyati] .

(訳は上掲 (1. sukhākam の項) につき省略)

§ 61. 3 nāyaṃ tāva kṣamati bhikṣuṇā prahāṇam upaviṣṭena auddhatyābhi-prāyeṇa osaritvā indriyāṇi maṭamaṭā¹ aṅgā bhañjantena vijṛmbhituṃ.² yathā sīhena vā vyāghreṇa vā unnadantena. 1. Ms. maṭamaṭa. 2. Ms. omits.

禅堂に坐っている比丘が、ライオンや虎が雄叫びをあげながら [あくびをする] ように、横柄な態度で諸々の感官を開いて、ガーッと肢体を伸ばしながら、[あくびをすることは] 許されない。

§ 61. 5 na₂ api kṣamati prahāṇam upaviṣṭakena maṭamaṭāya aṅgāni bhañjituṃ.¹

禅堂に坐っている者が、ガーッと肢体を伸ばすことは許されない。

§ 61. 7 na₂ api kṣamati bhikṣuṇā gocaraṃ vā praviśantena antaragharaṃ praviṣṭena maṭamaṭāye aṅgāni bhajantena vijṛmbhituṃ.¹

比丘が、托鉢地域に入り、[信者の] 家の中に入ったときには、ガーッと肢体を伸ばしながら、あくびをすることは許されない。

§ 61. 8 na kṣamati¹ upādhyāyācāryāṇāṃ vṛddhatarakānāṃ vā agrato maṭamaṭāye aṅgāni bhañjantena vijṛmbhituṃ.¹ atha dāni bhikṣusya vijṛmbhikā āgacchati¹ ekamatam gatvā vijṛmbhitavyaṃ¹. 1. Ms. omits.

和尚・師匠や年長者の前でガーッと肢体を伸ばしながら、あくびをすることは許されない。そのとき、比丘があくびをしたくなったらば、片隅に行って [あくびをすべきである]。

6. raṇaraṇāya (3), raṇaraṇāye (1), raṇaraṇā (1) 「カンカンと」

この3語は、いずれも𑖀𑖔𑖧𑖔 (gaṇḍī-) の音を表現するのに用いられている。raṇaraṇāya, raṇaraṇāye は、oblique case である。raṇaraṇā は、Pāṇini 5. 4. 57 の規定¹²により認められている語尾^o-a が付加されている形と考えられるので、raṇaraṇāya/raṇaraṇāye の誤写とする必要はなからう。

§ 4. 7 bhaktāni na bhavanti raṇaraṇā gaṇḍi āhaṇiya vaktavyaṃ.

¹² avyaktānukaraṇād dvyajavarārdhād anitau ḍāc. 「[taddhita 接尾辞] ḍāc は、前分が2音節以上の非分節のオノマトペで、[√kr-, √bhū-, √as-と共に用いられる際に] iti を伴わないときに導入される。」

自ら得た食べ物がない場合は、カンカンと犍椎を打ち鳴らして言うべきである。

§ 5. 7 bhaktakāni na bhavanti / **raṇaranāya** gaṇḍiṃ āhaṇiyāṇaṃ ārocitavyaṃ vaktavyaṃ : / āyusmato vipralabdho bhikṣusaṃgho svakasvakāṃ vṛtṭiṃ paryeṣatheti / sarvehi paṭipāṭikāya piṇḍāya caritavyaṃ. /

atha dāni āha : bhante etaṃ sidhyati etaṃ pacyati / praviśantu āryamiśrāḥ, **raṇaranāya** gaṇḍiṃ āhaṇiyāṇaṃ praviśitavyaṃ /

自ら得た食べ物もない場合は、カンカンと犍椎を打って告げるべきであり、言うべきである—「健在者らよ、比丘僧団は騙されたのです。各自、乞食して下さい！ 全ての〔比丘〕は〔法臘の〕順番に乞食に回りなさい！」と。

もしも「大徳よ、これが出来上がっています。これが調理されています。尊者らよ、お入り下さい！」と言われたならば、カンカンと犍椎を打って入るべきである。

§ 6. 7 atha dāni bhaktakāni na bhavanti, / **raṇaranāya** gaṇḍiṃ āhaṇiya yāva sarvehi paṭipāṭikāye pātrāṇi gṛhṇiya praviśitavyaṃ piṇḍapātaṃ. /

自ら得た食べ物もない場合はカンカンと犍椎を打って…中略…全ての〔比丘〕が〔法臘の〕順番に鉢を持って托鉢に入るべきである。

§ 17. 5 ete dāni vihārakā bhavanti / oddriṅṅakā paluggakā acaukṣā apratisaṃskṛtakā, tato **raṇaranāye** gaṇḍiṃ āhaṇiya sarvasaṃghena saṃnipatitavyaṃ.

精舎に裂け目ができ、壊れており、汚いままであり、修理されていなければ、カンカンと犍椎を打ち鳴らし、僧団の全員を集合させるべきである。

7. prakīrṇakasya (2), prakīrṇakaṃ (1) 「あちこちで」

skt. prakīrṇa-は、[Monier]、[Apte]によれば、pr√kṛ-「ばらまく」の過去分詞であり、「ばらまかれた、ばらばらの；雑多な」の意味で用いられている (prakīrṇaka-も同意)。語形としては prakīrṇakasya は prakīrṇaka-

の gen. sg. m./n., prakīṛṇakam は, prakīṛṇaka-の acc. sg. m./n.である。当写本の用例の文脈を検討すると, これも adv. 「ばらばらの [場所] で, あちこちで」に用いられていると判断される。acc. sg. n.が adv.として用いられることは, Cl. Skt.でも同様であるが, gen. sg. m./n.形と交替しても同様の意味で用いられるという事象は, 当写本の文法の特徴であろう。
 § 18. 2 te dāni bhikṣū prakīṛṇakasya ucchvāsam karonti. 'jano dāni odhyāyati :
 ' paśyatha bhāṇe śramaṇakā yathā uṣṭrā vā goṇā vā gardabhā vā chagalakā vā
 evam ime śramaṇā prakīṛṇakasya uśvāsam karenti. ' naṣṭam bhraṣṭam kuto
 eṣāṃ śrāmaṇyam. '

かの比丘たちはあちこちで大便をしていた。人々は不満を述べた。
 「見なさい, 実に沙門のやつらを¹³.まるで駱駝や野牛や驢馬や山羊のよ
 うにあちこちで大便をしています。彼らの沙門としての誇りは消滅し,
 墮落し, どこにいったのでしょうか。」

§ 19. 2 te dāni bhikṣuḥ prakīṛṇakam praśvāsam karonti. jano dāni odhyāyanti :
 ' paśyatha bhāṇe śramaṇakā ' yathā uṣṭrā vā goṇā vā gardabhā vā chagalakā vā
 eva me śramaṇakā prakīṛṇakam praśvāsam karonti. ' naṣṭam bhraṣṭam kuto vā '
 imeṣāṃ śrāmaṇyam.

その比丘たちはあちこちで, 小便をしていた。

人々は不満を述べた。

「見なさい, 実に沙門のやつらを。まるで駱駝や野牛や驢馬や山羊のよ
 うにこれらの沙門はあちこちで小便をしています。沙門としての誇りは
 消滅し, 墮落し, どこにいったのでしょうか。」

8. pharapharāya (2), pharapharasya (1) 「プップゥと」

この表現は, 屁の音を表現する際のオノマトペとして用いられている。

§ 62. 9 na_āpi kṣamati ' dharmaśravaṇe vā sāmāyikāyām vā auddhatyābhi-

¹³ 字義通りには, 「見なさい. [私は] 断言します. [ここにいるのは] 沙門
 のやつらです」. śramaṇaka-の*ka-は軽蔑の意味の接尾辞と考えられるので,
 「沙門のやつら」と訳した (cf. Pāli muṇḍaka-).

prāyeṇa vā **pharapharasya** vātakarma karttuṃ. / atha khalu ekaṃ piccakaṃ utkṣipitvā vātakarma karttavyaṃ.^{1/} 1. Ms. karttavyaḥ.

法話室や、集会室において、横柄な態度で、プップゥと屁をすることは許されない。そのときは実に、片方の尻をあげて、屁をすべきである。

§ 62. 10 na₂api kṣamati antaragharaṃ niṣaṇṇena auddhatyābhiprāyeṇa **pharapharāya** vātakarma karttuṃ. / atha khalu ekaṃ piccakaṃ ukṣipitvā saṃprajānan vātakarma karttavyaṃ. /

[在家者の] 家の中に坐っているときは、横柄な態度でプップゥと屁をすることは許されない。そのときは実に片方の尻をあげて、気をつけながら、屁をすべきである。

§ 62. 11 na₂api kṣamati / upādhyāyasya vā ācāryasya vā vṛddhatarakasya vā agrato auddhatyābhiprāyeṇa **pharapharāya** vātakarma karttuṃ. / atha dāni bhikṣusya vātakarma āgacchati / ekamantaṃ gacchiya karttavyaṃ. /

和尚・師匠や年長者の前で、横柄な態度でプップゥと屁をすることは許されない。そのとき、比丘が屁をしたくなつたならば、片隅に行つてからなすべきである。

9. hantahantāye (2) 「腹一杯」

hantahantāye という語形は2例であり、いずれも√bhuj-「(食事を) とる、食べる」という動詞と共に用いられている。この語形についても、他文献における用例は現時点では未発見である。語源は、感嘆詞 hanta の反復形・oblique case と考えられる。hanta は、[Apte] によると、喜び・驚き・同情・悲しみ・祝祷を表す感嘆詞である。当写本の用例では、食事の文脈で使われているので、「(食事が) 美味しい、美味いと」という感嘆詞の意味から、「腹一杯」の意味の adv. に転化しているものと推測される。

§ 5. 11 saṃghasthaviro na pratibalo bhavati / dviṭiyasthaviro pratibalo bhavati, na kṣamati / dviṭiyasthavireṇa **hantahantāye** bhuñjīyāṇaṃ labdho piṇḍo dvāraṃ paśyīya utthiya gantuṃ. /

僧団の上座が〔任務に〕堪えられなくて、第二上座が〔任務に〕堪えられる場合は、第二上座が腹一杯食べて、托鉢食を得て、戸口を見て、立ち上がって去ることは許されない。

§ 6. 11 na kṣamati labdhālabdham̐ hantahantāye bhuñjiya labdho piṇḍo dvāraṃ paśyīya utthiya gantum. /

手当り次第に腹一杯食べて、托鉢食を持って、戸口を見て、立ち上がって、去ることは許されない。

10. labdhālabdham̐ (I), lapyalayāye (I) 「手当り次第に」

lapyalayāye は、1 例であるため語形の確定も難しいが、品詞としては、文脈からして「食べる (√bhuj-)」という動作にかかっている adv. と考えられる。語源は、確定的なことはいえないが、√labh- の gerundive 形 labhya- の反復形の oblique case *labhyalabhyāye から、*lapyalapyāye → lapyalayāye と変化したものと推測される。すなわち、「得られるだけ得て」から「手当り次第に」の意味が派生したものと推測される。

labdhālabdham̐ は√labh- の過去分詞 labdha- の反復形であり、gatāgatasya と同様に、前分の末尾音が長音化していると推測される¹⁴。意味は、文脈からして、上記 lapyalayāye と同様であると考えられる。

§ 4. 13 tato na_ api kṣamati saṃghasthavireṇa labdho piṇḍo dvāraṃ paśyīya lapyalayāye bhuñjiyāna utthiya gantum.

そのとき、僧団の上座が托鉢食を得て、出口を見てから、手当り次第に食べて、立ち上がって去ることは許されない。

§ 6. 11 na kṣamati labdhālabdham̐ hantahantāye bhuñjiya labdho piṇḍo dvāraṃ paśyīya utthiya gantum. /

手当り次第に腹一杯食べて、托鉢食を持って、戸口を見て、立ち上がって、去ることは許されない。

¹⁴ この長音化の背後には、さらに *gatamgata- > gatāgata- の変化があった可能性がある。

11. khurākhuram (I) 「足にぶつかるほど、ぴったりと」

この語は、[Karashima 2012: I-69] にも指摘されているように、khura-「蹄」という語から作られた反復表現である。意味については、文脈からも、また§ 49.5 の用例からも、「(随行する者が先行者の) 足にぶつかるほど、ぴったりと」の意味であることが確認される¹⁵。

§ 8.6 gocaram praviśantasya grāmapraveśanikāni cīvarāṇi upanāmayitavyāni.
' vihāracaraṇakāni cīvarāṇi pratiśāmayitavyāni. ' ātmano cīvarakam gr̥hniya
pṛṣṭhato 'nugantavyam. ' na_ api dāni **khurākhuram**.'

托鉢地に入る者は、村に入るための衣を近くに置くべきである。精舎で活動するための衣はしまわうべきである。自分の衣を持って随行すべきである。そのとき足にぶつかるように「随行すべきでは」ない。

12. maḍamaḍam (I) 「ガーッと」

13. paṭapaṭā (I) 「パタパタと」¹⁶

maḍamaḍam および paṭapaṭā は、いずれも 1 例のみであることにくわえて、当該箇所を読みには校訂を加える必要があるが、文脈からして、筆者はいずれもオノマトペの adv. と解した。paṭapaṭā の語尾°ā-は、Pāṇini 5. 4. 57 の規定により認められている語尾であるから、その起源は相当に古い時代に遡りうると考えられる。

§ 61. 1 bhagavān śrāvastyāṃ viharati. ' te dāni āyusmanto ṣaḍvargikāḥ
prahāṇam upaviśtāḥ ' auddhatyābhiprāyā jambhayanti. ' aṅgāni bhañjayanti. '
paṭapaṭā sphoḍenti.¹ ' 2 **maḍamaḍam** yathā sīhā vā vyāghrā vā ' evaṃ
jambhayanti. ' yogācārān bhikṣūn śabdena vyāvahanti. ' etaṃ prakaraṇam
bhikṣū bhagavato ārocayemsu. '

1. or prasphoḍenti. Ms. vaphoḍenti. cf. prasphoṭayati 2. Ms. {amaḍam}.

¹⁵ § 49.5 nāpi kṣamati / khureṇa khuram hanantena. 「[自分の] 足によって [和尚等の] 足を傷つけながら [随行することは] 許されない。」

¹⁶ Kāśikāvṛtti に、paṭapaṭā karoti, paṭapaṭā syāt (パタパタと音をたてる) の例が挙げられている。[Kāśikāvṛtti: ad Pāṇ. 5. 4. 57]

世尊は舍衛城に滞在していた。健在者である六人組の者たちは禅堂に坐っており、横柄な態度であくびをしていた。肢体を伸ばしていた。パタパタと音を立てていた。ライオンや、虎のように、ガーッとあくびをしていた。ヨーガを行じている比丘を音によって悩ました。この問題点を比丘たちは世尊に述べた。

14. dharadhārāye (I) 「ブゥブゥと」

この表現も、屁の音を表現する際のオノマトペとして用いられている。
 § 62. 5 na kṣamati prahāṇam upaviṣṭena auddhatyābhiprāyeṇa vā **dharadhārāye** vātakarma¹ karttuṃ.^{2/} 1. Ms. vānakarma. 2. Ms. karttuḥ.

禅堂に坐っている者が横柄な態度でブゥブゥと屁をすることは許されない。

15. bhūyo bhūyo (I) 「くりかえし、連続して」

bhūyas は、単体で「再び」もしくは「くりかえし」を意味する adv. であり、その反復表現である bhūyo bhūyo は、「くりかえし、連続して」の意味と考えられるのが妥当であり、用例もこれを裏づけている。

§ 60. 4 atha dāni **bhūyo bhūyo** khajjati, khajjanako bhavati, prahāṇasya, āmantriya gantavyaṃ¹

そのとき、[比丘が] くりかえし [虫に] 咬まれ、咬むもの (= 虫) がいるならば、禅堂に告げてから去るべきである。

16. stokastokam (I) 「少しずつ」

この表現は、stokam ind. 「少し」の反復表現であり、[梵和] にも収録されている語である。当写本の用例からは、「少しずつ」を意味する adv. であると推測される。

§ 47. 8 atha khalu **stokastokam** mocayitavyaṃ.¹

[衣がとげのある枝に引っかかった場合] そのときは実に、少しずつはずすべきである。

17. dūre dūraṃ (I) 「離ればなれに」

dūre は、単体であれば「遠くに」を意味する adv.であるが、dūre dūraṃ という当写本の用例では「離ればなれに」を意味する adv.と考えられる。

§ 40. 15 atha dāni paṭipāṭikāye dūre dūraṃ prahāṇasya upaviṣṭā bhavanti, / ekena cāretavyaṃ.

[法臘の] 順番に離ればなれに禅堂に坐っている場合は、一人が [飲み水を] 回すべきである。

ま と め

本発表で扱った adv.を、使用回数（筆者の校訂による）、和訳、語形の種別、反復表現、擬音語性、擬態語性¹⁷、という属性を付加して一覧表にしたものが以下である。本稿で扱った個々の adv.の性格を理解するために、ご活用いただければ、幸いである。

また、ここで取りあげた adv.には反復表現が多く、その意味論および文法的考察——とりわけ大衆部の言語における——はほとんど未開の領域である。さらに、Cl. Skt.における用例¹⁸との比較を含め、今後に残された課題は少なくない。しかしながら、本稿によりそれらの研究を進めるための基礎資料を、わずかながらも提示できたと考えるものである。

¹⁷ オノマトペは、一般に＜擬音語＞と＜擬態語＞の2種に大別される。しかしながら、両者は、実際には「擬音語的性格の強いもの」と「擬態語的性格の強いもの」という区別でしかありえず、完全に分離できるものではないので、あえて＜擬音語性＞＜擬態語性＞という用語を用いた。例えば、[浅野 1978: 28]によれば、「ちょろちょろ」や「あっぷあっぷ」には両方の用法がある。その意味では、これは文脈によって変化するものであるから、絶対的な指標とはならない。ただし、語感を伝えるものとしてここに採用したまでである。

¹⁸ インドの知識人が、Cl. Skt.における反復表現を、文法学書との整合性をふまえて、いかに苦心して解釈していたかは、[川村 2011]にうかがうことができる。本論文は当該分野における今後の研究に裨益する基礎的研究である。

Abhisamācārika-Dharma における副詞の用法

No.	語形	和訳	語形の種別	反復表現	擬音	擬態
1	sukhākam (13)	そっと, 静かに	acc.	—	—	+
2	gatāgatasya (12)	あわてて	gen.	+	—	+
3	puno puno (10) / punaḥ punaḥ (1)	くりかえし	ind.	+	—	—
4	jhallaḥhallāye (4) / jhallaḥhallā (1)	ジャブジャブ	obl./ °ā	+	+	—
5	maṭamaṭāye (2) / maṭamaṭāya (2) / maṭamaṭā (1)	ガーッと	obl./ °ā	+	—	+
6	raṇaraṇāya (3) / raṇaraṇāye (1) / raṇaraṇā (1)	カンカンと	obl./ °ā	+	+	—
7	prakīṇakasya (2) / prakīṇakam (2)	あちこちで	gen./ acc.	—	—	—
8	pharapharāya (2) / pharapharasya (1)	プップゥと	obl./ gen.	+	+	—
9	hantahantāye (2)	腹一杯	obl.	+	—	+
10	labdhālabdham (1) / lapyālayāye (1)	手当り次第に	acc./ obl.	+	—	+
11	khurākhuṛam (1)	足にぶつかるほど, びったりと	acc.	+	—	+
12	maḍamaḍam (1)	ガーッと	acc.	+	—	+
13	paṭapaṭā (1)	パタパタと	°ā	+	+	—
14	ḍharadḍharāye (1)	プップゥと	obl.	+	+	—
15	bhūyo bhūyo (1)	くりかえし	ind.	+	—	—
16	stokastokam (1)	少しずつ	acc.	+	—	+
17	dūre dūram (1)	離ればなれに	loc. acc.	+	—	—

略号 : nom(inative), voc(ative), acc(usative), dat(ive), abl(ative), gen(itive), loc(ative),
ind(eclinable), obl(ique case), °ā (で終るオノマトペ) .

〈後記〉

なお、本稿が成るに当たり、かつて大正大学総合仏教研究所に組織されていた比丘威儀法研究会において、松濤泰雄先生、前田崇先生から頂戴した御学恩に改めて感謝申し上げるとともに、謹んで哀悼の意を表すものである。

(淑徳大学長谷川仏教文化研究所 専任研究員)

〈キーワード〉 Abhisamācārika-Dharma, 摩訶僧祇律, 威儀法, 副詞, 反復表現